慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	伊藤重次郎著 交通論 第一篇
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1917
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.11, No.1 (1917. 1) ,p.169- 172
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19170107-0169

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

子を以て貸出をしたのである。從つて當今の低利は單に金融の調節に關聯して發生せる一時的の現象たるに止まる。されば、此調節が完全に行はれたる曉には合衆國に於ける利子歩合は戰爭終結の如何を問はず今日よりも著しく高位を保つであらうと思はれる。

以上論述する所は予が戰後利子歩合が低率であるであらうと信ずる人々に同意することの出來ない理由の一部である。歐洲は戰後大に疲弊して巨額の資金を借入れるの力を有すまいと論じられて居る。若し戰爭が永引けば歐洲の借財力が今日よりも大に減退することもあるであらう。然しながら、吾人の記憶す可きことは假令歐洲が巨額の資金を借入れるにせよ將た又少額の資金を借入たるにせよ、是れ迄の如く貸手でなくして借手たるの一事である。加之、米國の餘剩資金は以前歐洲に於て資金を借入れて居つた後進國に供給せらるゝであらう。亞爾然丁、他の南米諸國並に東洋諸國は今後合衆國に於て資金を調達する樣になるであらうと思はれる。而かも此結果は又合衆國に於ける利子歩合を騰貴せしむるの傾向を有するものである。

最後に利子歩合の決定に關しては幾多の豫測し難き事情があるのみならず、豫測し得る事情に於ても何れが重要にして何れが重要ならざるかゞ不明であるを認めざるを得ないことを繰返して云ふて置きたい。從つて予が試みた豫言は大ざつぱの見當を附けたと云ふに過ぎない。予は歐洲の利子歩合が戰爭終結後多年の間騰貴するの傾向を有し、合衆國も幾分か其影響を蒙ることに就きては餘程の確信を有して居るも、同時に其騰貴の程度を數字を用ゐて豫言するは一の臆測を試みるに外ならないと云ふ可きである。（完）

批評と紹介

交通論

伊藤重次郎著
東京寶文館藏版

著者は早稻田大學教授にして、篤學の士なり今本書成る、一言なからざる可からず。

著者が本書を公にせし動機は、其序にあるが如く、第一は自己が眞面目なる研究の手段たらしむること、第二は教授上の不便を除かんとするにあり。而して批評者たる余は主として第一の見地殊に史的研究の方面に於て本書を考察せんと欲す、著者は先づ卷頭に於て「交通」の言語的意義と概念とに就きて研究せり。而して單に歐米學者の說を紹介するを以て滿足せざる著者は前者に關しては爾雅の註にある「交通四出」を揭げて其語の由來する處古きを論じ、轉んじてVerkehr の概念構成に就きて「シユモラー」「コーン」等諸學者の定義を擧げて一々之れを比較研究し其結論に於て著者自からの信ずる處を叙述せり。蓋概念といひ、定義と稱するもの何れも固定的のものにして流轉的なる實在其者を的確に表現すること不可能なり。此點は經濟學上の根本概念たる「財」「資本」に就きても同一なり。故に著書にして眞に交通其者の意義を論せんとせば斯くの如き煩雜なる方法を避けて單刀直入、交通其者の人生に於ける實在的意義を論ずる方、遙かに吾人の科學的良心を滿足せしめ得ると信ず。次ぎに交通の種類、各種交通機關の能力比較を叙し、更に日本の經濟學者の交通論たる特色を發揮せしめんが爲めに、第四章に於て本邦交通發達略史を揭げたり。著者が上古時代に於ける交通殊に陸上交通の幼稚なりしを論せし點に裏書する爲めに、余は魏志の「始

度一海千餘里、其大官曰卑狗、副曰卑奴母離、所居絶島方可四百餘里、土地山險多深林、道路如離禽徑、云々」を擧げんとす。又た、仲哀紀に「皇后（神功）別船自洞海入之、潮涸不得進、時熊鰐更還之自奉迎皇后、則見御船不進煌燿之、怒作魚沼鳥池、悉聚魚鳥、皇后看是魚鳥之遊、而愈々心解、及潮滿即泊于崗津」の如き臆げながら當時に於ける沿岸交通の狀態を察するを得可し。只だ著者が上古時代の海上交通論の中に「日本の商人は神功皇后や應神天皇以前に既に支那の手に貿易をして居たものと斷ずべき資料あり」（頁七〇）とあるが、當時支那方面と交通せしものは後漢書に「倭在韓東南大海中、依山島爲居、凡百餘國、自武帝滅朝鮮、使驛通於漢書三十許國、國皆稱王。云々」とあるが如く寧ろ商人にあらずして、九州方面の豪族なりしと信ず。次ぎに王朝時代を論ぜし中に「大宰府には新羅形の唐船を送つて、それを遣唐使の乘用にもするのであた」（頁七五）とあるは、其意義少しく不透徹、大宰府の官人命じて新羅形の唐船を造らせしめしものか、或は大宰府にて造られしものか、若、後者とせば大宰府は海岸を去る南方四里、斯くの如き設備の存するものとは解せられず。又、鎌倉時代の中に「兵庫に築港して宋船を博多よりも更に兵庫に來泊せしめんと企てるなど云々」（頁八〇）とある。博多は寧ろ今津とせし方、適當と信ず。何んとなれば當時に於ける日宋の交通は主として後者に於て營まれしを以てなり。次ぎに著者が德川時代を論ぜし中に、當時の交通上、最も重要なる意義を有する町飛脚制度に就きて述ぶる處比較的少きを遺憾とせざるを得ず。抑も〳〵飛脚名稱の起源は極めて古く倭訓栞に「ひきやく」とあり。源平盛衰記に「治承五年二月十七日伊豫國より飛脚ありて六波羅に着、狀を披ひて云々」とあり其他愚管抄東鑑等にも散見す。尙ほ、民營飛脚制度以前に公用道中飛脚制度（天正十八年）或は七里飛脚制度の如き存せしならむ。而して後者に就きては尾州七里飛脚制度は武藏國荏原郡六郷村より東海道池鯉鮒驛に至る中間十八ヶ所に小舍を設け、紀州は神奈川驛より佐屋驛に至る中間十四ヶ處に同じく小舍を設け、各飛脚を置き以つて往復の書狀を轉送せしめたり。尙ほ著者が擧げし飛脚制以外に寛文十一年大阪飛脚問屋島屋佐右衞門、江戸飛脚問屋備前屋與兵衞等によつて開始せられし金銀遞送即ち金飛脚後ちの中板組の如き又た一考を要するものなり。次ぎに第五章歐洲交通發達略史に於て吾人の遺憾とする處は埃及及び「フエニア」を擧げし著者が「バビロン」殊に「スメル」民族に於ける水路交通に就きて何等論ずる處なきことなり。最近、伯林の「ヒユベル」の研究によれば、「バビロン」の政治は殆んど治水事業にして全國に散在する數百の運河には必ず附近に倉庫ありて、貨物を海上に輸送するに極めて便利ならしめしことありと、又た著者が中世の歐洲交通を論ぜし中に一言「アルプス」開通の南北兩經濟地域に及ぼしたる影響を記することなきは之れ又た吾人の遺憾とする處なり。蓋、中世に於ける「コロンブス」の新大陸發見と歐洲の經濟的活動に與へたる影響は等しきものなりとす。次ぎに著者は第六章に於て交通發達の直接的影響を第七節にて交通發達の間接的影響第八章にて交通機關の創設、第九章交通營業費第十章にて交通賃率の概念及要件第十一章にて賃率の決定、第十二章にて交通政策に論及せり是等の研究問題に就きては著者は我邦經濟學界の「オーソリチー」なるを以て吾人後進の徒の猥りに批判を狹む可きもにあらず。之れを要するに、本書を一貫する特色は實に直摯の二字にありとす。余輩は著書が多忙の身なるに不拘、斯くの如き好著を我學界に提供せし

勞を深く謝せざるを得ず。安評多罪。（十二月十八日阿部秀助）

前號（第十卷第十二號）目次（大正五年十二月號）

論說

●民族主義の研究（慶應義塾大學教授）田中萃一郎
（墺國に於ける獨逸民族の地位）
●ジン・フェインの叛亂（上）（慶應義塾大學教授）占部百太郎
●保護關稅の効果（法學博士）氣賀勘重
●天保人別改令（下）幸田成友

雜錄

●英佛兩國對獨逸貿易上の關係（法學博士）堀江歸一
●新造船の輸出に就て　增井幸雄
●ジード氏の戰時並に戰後財政論　高城仙次郎
●佛國戰後の農業　增井幸雄

（批評と紹介）

●金井教授在職二十五年紀念『最近社會政策』

（附錄）

●本誌第十卷總目次

編輯主任　堀江歸一　高城仙次郎

●一冊定價　金二十五錢　郵稅金　壹錢五厘
●一ヶ年前金　金二圓七十錢　郵稅共
●編輯及び事務に關する一切の用件は發行所宛
●營業に關する用件は發賣元宛
●原稿締切期日は發行の前月十日限

大正六年一月六日印刷納本
大正六年一月七日發行

毎月一回一日發行

三田學會雜誌
禁轉載
第十一卷第一號

東京市芝區三田二丁目二番地慶應義塾內
編輯兼發行者　石田新太郎
東京市麻布區龍土町七十五番地
印刷者　金子榮太郎
東京市赤坂區新町五丁目四十二番地
印刷所　金子活版印刷所

東京市麴町區有樂町一丁目一番地
發賣元　籾山書店
振替貯金口座東京二四一七番
電話本局二一三二番

●尚ほ本誌は全國各市雜誌店にて販賣す

發行所　東京芝三田慶應義塾內　理財學會